

ペルテス病の治療

座長：赤 澤 啓 史

ペルテス病の治療に関しては、発症年齢別治療法の選択、長期治療成績からみた治療法の再検討など、まだまだ解決すべき課題が多く残っている分野である。本主題では、これらについて4題の発表と討論が行われた。

大阪府立母子保健総合医療センターの田村太資先生は予後良好とされる5歳未満の症例を検討して発表された。他の施設に比べて5歳以下の症例の比率が多かったが、その理由は不明であった。壊死範囲が広い症例や両側例では予後不良の例が多く、注意深い経過観察と適切な治療が必要であるとのことであるが、具体的な治療法についての報告はなかった。

埼玉県立小児医療センターの平良勝章先生は保存療法の成績を報告し、短期入院後の外来治療(Tachjian 装具, Atlanta 装具)例でも、良好例が多かったとした。しかし、Catterall 分類2型のものが多かったためかもしれない。6歳以上発症でCatterall 分類3型以上での良好群は37.5%しかなかったもので、このような例には手術的治療を検討する必要があるという報告であった。

金沢こども医療福祉センター石川整肢学園の櫻吉啓介先生は、稀な疾患であるプロジェリア症候群に発症したペルテス病について報告された。骨年齢や骨端線閉鎖時期は年齢相応であったという報告である。原疾患との関連で、治療法選択が難しいが、児に対してQOLを考慮した治療法が求められる。

愛媛県立子ども療育センターの佐野敬介先生は長期経過例について発表された。外国の論文には長期経過例の報告が散見され、長期経過例ではOAの比率が高くなり、人工関節の症例が増えるといわれているが、本邦では30歳以上の長期経過例の報告は少ない。今回の報告においても40歳以上になると、高率にOA変化が現れることが報告された。今後も引き続き症例数を増やして、本邦での予後予測の基礎データを作っていくてほしい。